

木村 横斜（きむら・おうしゃ）

1、プロフィール

俳人。秋声会に参加、また、子規選の「日本」に投句。また、郷里へ帰って後、東奥日報社記者となり、青森県の俳句・川柳等の普及に努めた。

<生没>

1870(明治3)年3月20日 ~ 1926(大正15年)年1月6日

<代表作>

『横斜遺稿』第1集、第2集『茄子籠』(合同句集)『ゆきのした』(合同句集)

<青森との関わり>

弘前町(現弘前市)生まれ。東奥日報社に入社し編集長等の要職をこなす。俳句結社を結成し県俳壇に尽力した。

2、作家解説

本名元三郎。東奥義塾を経て、明治29年東京専門学校を卒業と同時にジャーナリストの道を進み始める。まず、東京毎日新聞社に入り、ついで世界之日本社に移ったがまもなく帰郷。俳句の方は、学生時代陸羯南の「日本」に入社していた佐藤紅緑のもとに出入りして興味を抱くが、紅緑は横斜に1夜50吟を強いたりした。毎日新聞記者時代は、同僚の岡野知十らと秋声会に参加、さらには紅緑らと子規の指導を受けていた。

帰京後明治31年、桂閑村、古川天仙、渋谷四楽らと「無名会」を結成するが、これは県下における新派俳句の最初の吟社であった。翌年紅緑の提唱で「太平会」へと発展解消、後に結成する野辺地の「笹鳴会」とともに当時の県俳壇の推進役となった。

32年青森に週刊誌「暁鐘」が創刊され、主筆として迎えられたが結局廃刊、34年東奥日報社に入社、青森では久保小琴と同宿し、そこを「琴斜庵」と称し、句作に励んだ。

明治 39 年河東碧梧桐が来県し、新傾向俳句が県内を席捲するようになるが、横斜はそれに組みすることなく、大正元年には嶋川観水、藤原柯芳らと「古男会」を結成し句作していた。一方、東奥日報社にあっては、俳句の他に俳論、随筆、評論から川柳までの広い分野で活躍、筆名も横斜木客、鬼来梅花顛人、横生、斜子、髭八、抱仏、洪面、泥仏、与太郎、木魂、独鈷などを用いていた。編集長から、大正 8 年には取締役となり、さらに主筆をもかねるようになった。

大正 15 年に没するまで、その半生は俳句と東奥日報社のために費やされたが、東奥俳壇の無記名選の選者をしていた時に選を受けた高松玉麗らが興し、横斜自身も正選者を務めた松濤社から、死後『茄子籠』（松濤社叢書第 3 集、横斜の句中心）『ゆきのした』（松濤社叢書第 4 集、横斜の句文集中心）が刊行された。また、昭和 3 年、古男会のメンバーを中心とした横斜遺稿刊行会より『横斜遺稿第一集』『横斜遺稿第二集』が刊行された。

3、資料紹介

○『ゆきのした』

図書

1928(昭和3)年 10 月 10 日

185mm × 125mm

松濤社叢書第 4 集。大半を横斜の俳文・書簡に当てる。郡場秋蝶が「横斜の思出」、竹内俊吉が「木村横斜の詩的態度」を記述。第 3 集『茄子籠』と同様、横斜の遺稿集の体裁をなす。他に松濤社同人の自選句を収める。